

## 北海道の街路樹 : 8題

著者	前山 和彰
雑誌名	生涯学習研究と実践 : 北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要
巻	8
ページ	171-180
発行年	2005-03-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00002292/">http://id.nii.ac.jp/1136/00002292/</a>

## 北海道の街路樹 8題

### Roadside Trees of the Hokkaido : Eight Examples

前 山 和 彰

MAEYAMA, Kazuaki

#### I はじめに

2004年（平成16年9月9日）の北海道新聞より。

台風18号の記事により紙面はうまっていた。「50m暴風 道都まひ」、「台風18号猛威」、「街路樹倒れ 道ふさぐ」、「北大のシンボル倒れる（ポプラ）」、これらは、「見出し」の一部である。さらに、最大瞬間風速50.2m。

8日、北海道の日本海側を縦断した台風18号は、観測史上最高の猛烈な風を伴って、道都・札幌を直撃した。根こそぎ倒れる街路樹、はがれ飛ぶトタン屋根……。市内のあちこちで人が続出、道路は通行止めとなり交通機関は混乱、停電も広がり市民生活はまひした。収穫間近の果物など農業被害も深刻な事態に……。吹き荒れた風台風は、自然の脅威を見せつけた。街路樹などの倒木、半倒木2377本にも上った。

これらは、札幌市に限ったことではなく、道内の他の市町村にも及んだのである。例えば、北広島市では、街路樹が300本も倒れたと記されている。

街に潤いを与えるはずの街路樹が、強風下ではとても危険な存在に変わってしまった。1954年（昭和29年）の洞爺丸台風と同じような進路をとり、風台風となり、道内の街路樹、路傍樹などを襲ったのである。

ナナカマドなど果実のたくさんついたものは、枝がもぎ取られ、飛んでしまうのだから、まさに、凶器そのものと化してしまった。

また、根こそぎ倒れた樹が数多くある。街路樹は歩道をくりぬくように開けられた「ます」に植えられ、根の張りがよくないのである。

ごく身近にあり、目にしたこともある数種類の街路樹と、その選定条件や植えられる条件について考察する。

## Ⅱ 街路樹としての樹種の選定条件

街路樹はその生育条件が悪い場合が多く、樹種の選定にあたっては、一般に次の諸条件にあてはまるものが要望される。

- ① 強健で大気汚染や病害虫に耐えられるもの。
- ② 剪定や整枝に耐えられるもの。
- ③ まっすぐな幹で、葉、枝、幹などの美しいもの。
- ④ 人畜に無害なもの（毒性のないもの）。
- ⑤ 樹齢の長いもの。
- ⑥ なるべく落葉樹で、夏は日陰をつくり、冬は日光をさえぎらないもの。
- ⑦ 移植および繁殖の容易なもの。
- ⑧ 大気を清浄化するもの。
- ⑨ 踏み固められた地面に耐えられるもの。

## Ⅲ 北海道の街路樹 8 種

### 1 ナナカマド（バラ科）

- ① 春に白い花を咲かせ、秋になると、赤い葉と赤い実を見せ、野山を紅葉させ彩り、冬には、ヒレンジャク、キレンジャク、さらにムクドリが訪れ、賑やかである。
- ② ナナカマドは<sup>り</sup>「七竈」と漢字では書き、生木から炭ができるまで、七回竈に入れても炭にならないところからついた名前といわれている。従って、良く燃えない木といわれている。
- ③ 街路樹にも多く利用されているが、秋の山を彩る紅葉の中でも、ナナカマドの葉はとりわけ美しく紅くなり、木の葉が落ちた後も、赤い実が強い風でも吹かない限り、いつまでも残るのが印象的である。
- ④ 忙しく飛び回る、虫たちの助けをかりて受粉し、人々の目を楽しませる果実の秋を迎える。
- ⑤ 葉が緑色の終わりから、果実は赤くなり始め、鳥に食べられなければ、紅葉した葉が落ちきって、雪が降り始めても残っている。果実の赤色を取り巻く色が、緑から赤、そして白（雪）へと変っていく。

- ⑥ 寒い北西の風の吹くころには、シベリアからやってくるヒレンジャク、キレンジャク、がこの赤い実をついばみに来、それにより、この木の種をあちこちに散りばめてくれる。
- ⑦ 初夏、ひとかたまりになって咲く白い小花はとてもきれいで、北海道の都市の街路樹にもなっている。
- この花の花言葉が「怠りない心」である。交通ラッシュのメーン・ストリートに植えられたナナカマドの並木には、「安全」「慎重」「用心」の交通事故防止の願いもこめられている。

## 2 イチイ（イチイ科）

- ① イチイを北海道では、オンコと呼んでいる。これは北海道独特の呼び名で、青森県の方言であるとか、先住民族の呼び名だともいわれている。アララギともいうが、これは和歌の世界の呼び名である。
- ② 大化の改新の際、聖徳太子が12冠位を制定され、彼はその最高の位である・正一位であった。正一位の聖徳太子が手にしていた笏（しゃく）にイチイの木が用いられていた。これがイチイの木の名前の由来である。
- ③ この木は、雌雄異種で、雌株には赤い実がつく。小鳥はこの果実を食べて、遠くまで運び、種はフンとして放出し、この木の繁殖を助けている。
- ④ 北海道では庭園樹、生け垣として広く用いられ、萌芽性が強く、刈り込みに耐える。とくに西洋庭園では強く刈り込んだ幾何学的形態や動物に似せた形を作るのに用いられている。
- ⑤ 1972年（昭和47年）、冬季オリンピック札幌大会を目前にひかえた<sup>2)</sup>札幌。駅前通りは地下鉄の新設工事により全面的な改造が行われ、装い新たな通りには、ハルニレ、イチイ、アカシアなども植えこまれて、北国の新しいシンボル・ロードとして誕生した。
- ⑥ この木の花言葉は「高尚」。木そのものが優雅な容姿である。この木のそばを通る時には、背筋を伸ばし、スタイルも良くし、さっそうと通り過ぎた方が良いかもしれない。

## 3 イチョウ（イチョウ科）

- ① 山野に見ることは無く、もっぱら札幌市など市街地の街路樹、または、公園、庭木とし

て植えられている。

- ② 江戸時代には「異朝の木」とか「寝蝶」だという異説もあったが、貝原益軒の「大和草子」にある「一葉」(葉が一枚だけつく)で統一されてきている。
- ③ 今から一億五千万年程前、地質学でいう中世代のジュラ紀の頃、イチョウは地球上で全盛を誇っていたのである。ジュラ紀というとアンモナイトが全盛、陸上では恐竜(クビナガリュウ・ステゴサウルスなど)が全盛を極めた時代で、現在では、この地層から、石油・石炭が産出されている。
- ④ ところが、その後、氷河期がやってきて、地球上の植物がほとんど死んでしまったが、中国の気候だけがやや温暖であったため、このイチョウだけが生き残り「生きた化石」といわれている。
- ⑤ そして現代。大木になっても整然とした、見事な円錐の樹形をくずさず、世界中の並木道で、堂々とした姿勢をみせている。
- ⑥ 黄葉のころ、たわわに実った銀杏が、落葉と前後して落下する。外側の果肉状に見える部分は外種皮で、臭みが強く、人によっては触れるとかぶれる。
- ⑦ 雌雄異種で、スカート型の葉が雌で、切れ込みの大きいパンタロン型の葉が雄。「ちゃんむし」などで、おつな味つけになる「ギンナン」(銀杏)は、雌の木だけになる。イチョウの種でもある。

#### 4 アカシア(マメ科)ニセアカシア

- ① 北海道では、アカシアの名で通っているが、アカシアは全く別の熱帯の木である。
- ② 札幌でのアカシアという名前は、学名の一部をとって呼び慣わしているもので、本当の学名は「ロビニア・ニセアカシア」といい、和名は、針のようなトゲがついているところから「ハリエンジュ」(針槐)という。
- ③ 本物のアカシアは、ニセアカシアとは全く別の属で、似ても似つかぬ花をつける木である。アフリカではゾウやキリンの食料にされている。熱帯地方の木であるから、日本では植物園の温室にでも行かなければ見ることはできない。

- ④ 明治の初めに、北アメリカから持ち込まれて以来、北海道の開拓地（札幌）を中心に街路樹として広まってきた。
- ⑤ 甘い香りのする白い花は、強い雨に降られると一晩で、まるで雪が降ったように、道を真っ白に埋めつくす。
- ⑥ ところが近年。街路樹としてせっせと育てたが、すぐ大きくなり、店先を暗くするので商店がじゃまにした。枝を切り落とされる木がふえ、たまりかねた道庁が「大事にしろ」と「おふれ」を出すほどだった。
- ⑦ 今も、札幌市内のアカシアは、交通のじゃまになるという理由で枝を切られ、あまり花を咲かせない。剪定に思いやりがなく、芽がついた枝を切ってしまうからである。
- ⑧ フジの花に似た白い花をつけるこの植物に、ニセアカシアという名をつけ、全く花には気の毒なことである。学名の前の部分から「ロビニア」にしようという案もあったが、思うようにはいかないものである。

## 5 ライラック（モクセイ科）

- ① ライラックは、東部ヨーロッパ原産であり、日本原産のものではない。しかし、今では北海道のものになりきっている。水はけが良く日当たりの良いところを好む。最近の図鑑には「札幌の木」と記されている。昭和35年の市民投票でアカシアと競り合い、わずかの差でこの木が勝ったからと記されている。
- ② ライラックは英語名であり、フランス語では、「リラ」と呼ばれ、日本には、これに似た「ムラサキハシドイ」があるが、この名は使用されることが少ない。
- ③ ライラックは、札幌北星学園の創立者クララ・スミス女史が、アメリカから日本へ苗を持ってきたものといわれている。一方、リラは、関東・関西の園芸家がフランスから輸入し、花屋が関東・関西地方に販売したといわれている。従ってこれが、北海道ではライラック、本州ではリラと呼ばれている所以でもある。  
札幌のアナウンサーが、「リラ冷えの、ライラック祭り」などと表現することもあるがこれは語感の問題であり、間違いとは言えない。
- ④ 戦争中、1943年（昭和18年）、「英米語」の使用が禁止され、そのあおりを受けたのは、北海道の「ライラック」である。中でも、創立者がアメリカの人であり、校庭に多数のラ

イラックのある札幌北星学園がその標的となってしまう、同校のライラックは、日本帝国陸軍の手により、切り倒されてしまった。だが、個人の庭木とされているものや北海道帝国大学（いまの北大）の校庭のライラックが生きのびたのは幸いであった。

- ⑤ ライラックにとり、受難の時期はあったが、北海道全体の木に及んだわけではないことから現在のように、札幌ばかりでなく、北海道の各都市の街路樹として、親しまれている。甘い香り漂うライラック祭は、毎年6月上旬頃、札幌市民を挙げて祝われている。
- ⑥ 今では、車のガス公害など、悩みはつきまどっている。これは、すべての街路樹にふりかかっている問題である。ガス公害を少なくする方法はないものだろうか。
- ⑦ ライラックの花言葉は、色によって違うが全体的には「愛の芽生え」。紫は「初恋の感動・情緒」、白は「若さの喜び」あるいは「幼い無邪気さ」。いずれも、この花の色と、詩情よぶ香りからも、うかがい知ることができる。

## 6 ポプラ（ヤナギ科）

- ① 背が高く、「草ぼうき」を立てたように直立するポプラ。それは広々とした北海道の平原には欠かせない景物である。
- ② 日本に入ったのは、明治10年以前。ポプラからとった木炭が、火薬の原料になるという説が当時あり、北国のロマンを代表するこの木も最初は軍事目的で移入された。
- ③ ポプラは土質を選ばず、やせた土地でも育つし、煙害に強く、成長が速い。こんなところが、いち早く緑化を必要とする開拓地では、進んでポプラを植えたといわれている。
- ④ ポプラは、30mもの高さになるのに、根の張りが浅いため風に弱く、また虫がつきやすく、幹の空洞化が激しい。樹齢自体も50年から60年と、巨木としてはきわめて短い。
- ⑤ この木は、水分の豊富な土壌と、乾燥した気候風土を好む。ポプラにとって、日本は湿潤すぎたともいわれている。
- ⑥ 北大構内の並木は、明治35年、林業実習苗として植えられたが、その仲間は現在1本も残っていない。明治45年30本、昭和30年30本植え足しているが、その間にも、数本のポプラが倒れている。昭和29年の秋、「洞爺丸台風」で数本が倒れたのをはじめ今回の18号台風では20本も倒れてしまった。今後の対応については、北海道大学で考慮中である。

- ⑦ どの市町村でも、ポプラは倒れた際の危険を避けるため、道路からかなり離れたところに、路傍樹として植えられている。

## 7 プラタナス（スズカケノキ科）

- ① 和名のスズカケノキより、学名のプラタナスといった方が通りがよい。札幌では、ニセアカシア、ナナカマド、イチヨウについで4位になるほど街路樹として植えられている。
- ② 和名のスズカケノキは、この木の球状の果実が、鈴なりにつくことから「鈴懸の木」と書くようになった。しかし、今では学名のままプラタナスと呼ぶことが多い。
- ③ 日本に渡ってきたのは、明治8、9年頃らしい。明治37年、東京・日比谷公園に試植されたのが最初である。植えてみると成長がはやく、大型の葉が美しいところから本格的に街路樹の仲間入りをし、まもなく札幌にも移入された。
- ④ わが国では、プラタナス<sup>3)</sup>の北限は、石狩・空知地方の南部とされている。道東の寒気には耐えられないのだろう、目にすることはない。
- ⑤ スズカケノキ類は、成長が盛んなので、枝払い、剪定を十分にしなければならない。
- ⑥ 花言葉を「天才」というのは、古代ギリシャでは、この木蔭で、かの有名な哲学者プラトンやアリストテレスが講義をし、議論したと、いういわれからきているらしい。
- ⑦ 「天才」という花言葉をもつこの木は、枝の下を通り過ぎる人々に、「天才的な手腕を発揮すること」を願っているにちがいない。

## 8 サクラ（バラ科）

- ① 日本では「花」といえば、普通サクラを意味する。日本人は昔から草木の花を大事にしてきたが、サクラはその中でも特別な意味をもつ。わが国の国花でもあり、広く愛好されている。
- ② サクラの語源については、数説あるが、有力な説は、「咲く」と「ら」から、「たくさんの花が、群がって咲く」という意味だという。すると桜花の咲く状況とぴったりする。
- ③ 文学・歴史・芸能・社会・美術・工芸、果ては人名にまで、サクラはほとんど、どの分

野にも及んでいる。これほど生活に密着した花も珍しい。「花見」もそうである。

- ④ 北海道のサクラは、南部のソメイヨシノを除くと、ほとんどがヤマのサクラであり、その主体は、花が大きく、色もあでやかなエゾヤマザクラである。
- ⑤ 北海道のサクラの名所といえば、〈松前のサクラ〉、〈函館公園、五稜郭〉いずれもソメイヨシノが主である。〈札幌・円山公園〉、〈神居古潭〉、〈厚岸公園〉いずれもエゾヤマザクラの名所である。
- ⑥ 明治18年に、札幌の駅前通りに、ニセアカシア、サクラ、ヤナギなどを街路樹として植えた。しかし、当時は街路樹に対する市民の理解が乏しく、店頭の妨害になるとか、落葉の掃除がやっかいだとか苦情百出して伐採を迫ったり、暗夜、のこざりて損傷させ枯死を凶る者すらあった。
- ⑦ でも、日露戦後ごろからは市民の関心も高まり、明治38年に大通り防火線にサクラなどの戦勝記念樹、44年には皇太子殿下の行啓を記念して行啓道路にサクラが植樹されるなど、市内の街路樹は徐々に体裁が整えられてきた。
- ⑧ その後、大正、昭和にかけて植栽が行われ、現在見られるような街路樹の形態がつくられ、それが道内各市町村の街路樹の模範となり、広まっていったのである。
- ⑨ 「精神美」がサクラの花言葉である。花を咲かせ、葉を風になびかせ「人間的な細かな気配りと、大胆な行動力を兼ねそなえている人」、そんな人が多くなることを願いつつ街路に癒しを与えているのである。

#### IV おわりに

- ① 街路樹には、多くの樹種があつて、高くなるもの、低いままであるもの、横に広がるもの、細いものと、さまざまな性質をもっている。

電柱があつて、電線が張られ、電話線だの、街頭放送のケーブルなどがゴチャゴチャになってくると大変である。その下に、街路樹として植えられたばかりに剪定が始まる。枝が上に伸びるとチョン、横に広がってもチョン、樹木が変形し衰れな姿となってしまう。

樹の持っている天性を人様の都合で押しつぶしてはいけない。これこそが緑に包まれた誇れる都市だと思う。

道内をドライブすると、異様な雰囲気にも包まれた街に、入ることがある。電柱が見当た

らず、街灯の柱と街路樹だけが立っている。電線は地下に埋設されているのである（十勝・士幌町、胆振・穂別町など）。このようなことが道内の各都市でも行われると、街路樹に優しい都市と言えるのだが、そのためには、相当な時間と、費用のかかることは否めない。

これが、今後の大きな課題でもある。

- ② 都市が都市化して、交通は過密となり、工業地域の集中化が進むと、亜硫酸ガスやオキシダントなど、大気を汚染する物質がますますふえる。こうした現象は、一様に膨張する都市の悩みとなっている。

亜硫酸ガスなどに対する抵抗力の強い樹木ばかりでなく、抵抗力の小さな樹木がいつまでも育ち得る、街を維持していきたいものである。それは、樹木にとっても、人間にとっても快適な街にちがいない。次世代を担う子供たちに負の財産を残してはいけない。

これも、大きな課題である。

- ③ どのような樹木にも根があり、その根は大地にしっかりと伸び、広がり、樹木の生活を支えていることは誰でも知っている。森林の樹木は、大地の中を空中の枝の広がりと同じように自由気ままに伸びているが、街路樹は、そんなわけにはいかない、それが規制されるのである。

道路舗装のため、樹種にもよるが根元が、90cm×110cm～110cm×124cmの長方形のコンクリートわくに押し込められているので、幹が成長しても根は四方に張り出すことができない。また、木が倒れないためには、枝の広がりとはほぼ同じ範囲で剪定しなければならない。

また、交通や店舗の障害も考慮する必要がある、どうしても強剪定になる。

さらに、車の排気ガスと衝突傷といった車公害にも気を配らなければならない。

街に潤いを与えてくれる樹木たちに、十分な生育空間を確保すべき時代がきている。

与えられることだけを望み、与えることを忘れていると、また、つけが必ず回ってくるにちがいない。

## 注

- 1) 原 秀雄 (1977)：北方植物園 朝日新聞社 p69
- 2) 山田恒史 (1983)：植物の世界 8 卷 朝日新聞社 p167
- 3) 戸部智弘 (1979)：北海道道路53話 北海道新聞社 p186

## 参考文献

- 1 札幌市 (1986)：札幌の樹々 北海道新聞社
- 2 深沢 正 (1994)：木の名の由来 東書選書
- 3 鮫島淳一郎 (1991)：北海道の樹木
- 4 瀧井康勝 (1991)：誕生花の本 日本ヴォーグ社
- 5 春田俊郎 (1997)：植物は不思議がいっぱい PHP文庫
- 6 鮫島淳一郎 (1998)：北海道 森を知る 北海道新聞社
- 7 NHK取材班 (1990)：地球汚染 日本放送協会